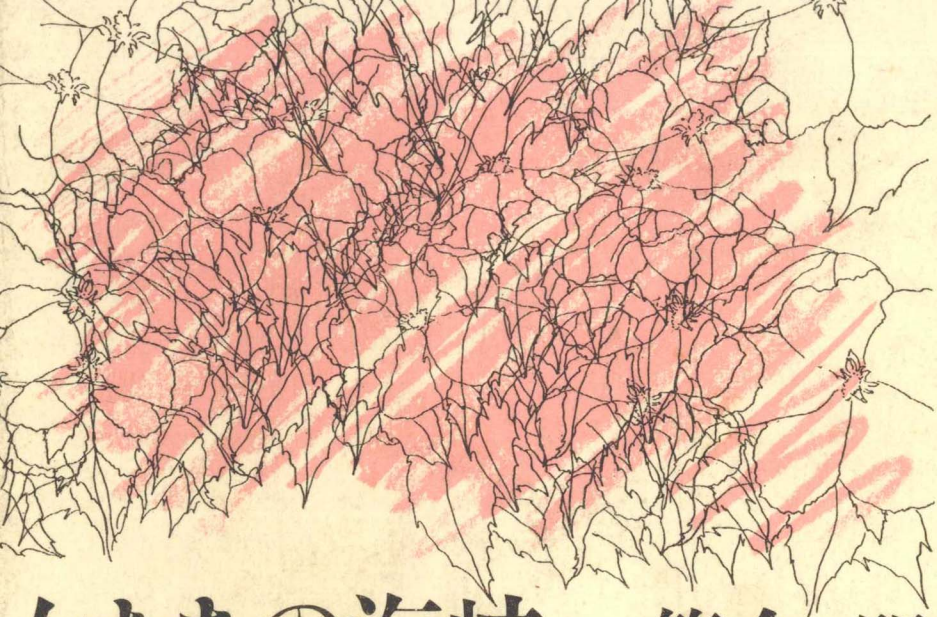
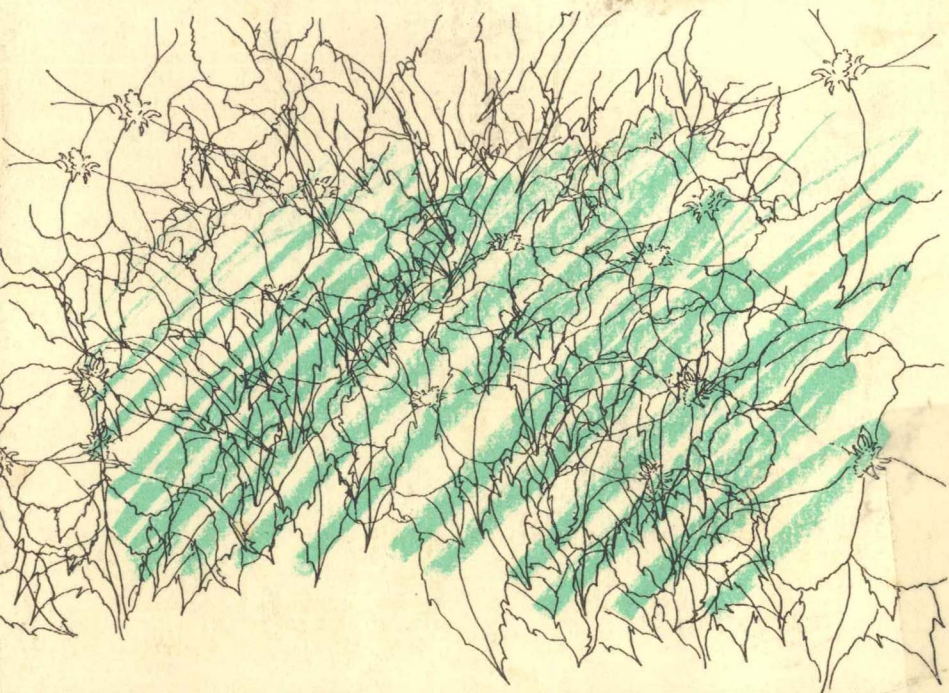




# 女たちの海峡 笹倉 明



講談社

# ちの海峡

笹倉  
明



わたちの海峡

定価 一三〇〇円 (本体 一二六円)

著者 笹倉 明

一九九一年一月一六日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一十二一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 三九四五一一一 (大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©Akira Sasakura 1991, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、

文芸図書第二出版部にてお願いいたします。

ISBN4-06-205183-4 (文二)

目次

|     |       |     |
|-----|-------|-----|
| 第一章 | 発端    | 5   |
| 第二章 | 空の船出  | 15  |
| 第三章 | 父国    | 41  |
| 第四章 | 新たな事実 | 65  |
| 第五章 | 再びの霧  | 81  |
| 第六章 | 海峡の街で | 99  |
| 第七章 | 熱い雨   | 133 |
| 第八章 | 流転のひと | 164 |
| 第九章 | 帰郷    | 189 |
| 終章  |       | 209 |

装  
幀  
  
司  
  
修

女  
た  
ち  
の  
海  
峽



## 第一章 発端

### 1

その老人の顔は、皺<sup>しわ</sup>深くやつれていたが、決して醜<sup>みにく</sup>いとか怖いというのではなかった。ギョロリと飛び出した目に、いくぶん異様な感じがあるだけで、他にはこれといった特徴もない。にもかかわらず、美<sup>み</sup>弥<sup>や</sup>子<sup>こ</sup>にとって、その存在が気にかかるのは、振り向けられる視線が単なる隣人のものにしては粘<sup>ねば</sup>つこすぎるように思えるからだった。

老人は、道路沿いに二棟ならんだアパートの、ふるい木造モルタルのほう、つまり、第一月見荘の一階の角部<sup>かど</sup>屋に住んでいる。

美弥子が一年前、その向かいの第二月見荘の二階へ、同じ市内の南六丁目から越してきたときには、老人の姿は見えなかった。それが、三、四ヵ月前から、玄関ドアを出ると、すぐ斜め下の部屋に見かけるようになったのだ。

ふたつのアパートは、ひとの背丈<sup>せぢ</sup>ほどの薄汚れたブロック塀で仕切られている。第一月見荘

のほうは塀との間にわずかな庭があり、新しい第二月見荘のほうはツツジや沈丁花などの植え込みが塀に沿ってある。春先のころ、ひどい花粉症に悩まされた美弥子は、その原因が塀の向こう隅にある大きな杉の木のせいではないかと思ひながら眺めていて、ふと老人の視線に気づいたのである。

サッシの窓には、カーテンがかかっていた。いつも透けて見える六畳一間きりの部屋には、家具らしい家具もない。おおむね敷きっぱなしのセンベイ蒲団に、老人の寝起きするようすが折りにふれて窺えるのだった。

その視線は、美弥子が姿を見せるのを待ち構えていたかのように斜め上へと向けられることがしばしばで、ガラス戸の内側からだったり、天気の良い日には裏庭からであったりもする。それが不快というのではなかった。たいていは、笑みさえたえて見えるくらいに和やかな眼差しであり、とりようによつては、年老いた独りの男の、若い隣人へよせる親しみの情にすぎないともいえた。

いずれは、何らかの言葉を交わさねばならない日がきそうな気がしていた。

その朝、美弥子はいつものように宏昭を保育園へ送って戻ってくると、ゴミ収集車が通った後のアパート前の道を掃く浴衣姿の老人と出くわした。

目が合い、かるく頭をさげると、相手はすぐさま、

「可愛い坊やだね」

と、声をかけてきた。

美弥子が、どうも、と肩をすぼめて答え、そのままアパートへ入ろうとすると、

「どの園に行っているの」

聞かれて、足をとめないわけにはいかなかった。

はじめて耳にする老人の声は、やさしく穏やかだったけれど、その視線と同様、ある種の粘つきが感じられた。

「中原保育園です」

美弥子は、すこし照れるように答えた。

「もうすぐ夏休みじゃないのかな」

「はい」

老人は、朽ちかけた前歯をみせて微笑ほほえみながら、

「夏休みは、どこかへ出かける予定でもおありかな？」

立ち入った問いを投げかけられて、美弥子は当惑した。

はい、とだけ答えて過ごしてしまおう、ただの隣人に、それも今日はじめて口をきいたひとに、自分たちの予定をまともに話すこともない。

そうは考えてみたけれど、なぜかできずに、

「ちよっと、海外のほうへ」

と、告げた。

「ほう」

老人は、わずかに顎をしゃくり上げた。

海外というと、どちらのほうへ、と重ねて尋ねてくるだろう。そう予想して身構えたが、相手はただ目を細くして笑い、

「気をつけていきなさい」

と、いった。

はい、と美弥子は返すと、こんどこそ身体の向きを変えた。二階へと階段をのぼっていく自分の後姿へ、老人の相変わらずの視線が注がれているのを感じて、妙に落ちつかなかった。

## 2

いつもなら、さっそく自分も出かける支度をするのだが、その日は有給休暇をとっていた。たまには、滞った家のなかの仕事を片づける時間が必要なのだった。

美弥子は、しかし、すぐにはその気になれなかった。ぼんやりと台所のテーブルに頬杖をつき、さっきの老人との会話を、そこに何かの意味がひそんでいるのではないかといぶかりながら思い出してみる。

まるでこちらが海外へゆく予定であることを察しているかのような口ぶりではなかったか。そう思うと、知らずと胸騒ぎがおとずれて、かすかな混乱をさえおぼえた。

七十歳くらいか、二つ三つ大きなシミの浮いた顔の肌はうす黒く黄ばんでいるが、まだわず

かながら脂氣をとどめていて、つるりと後退して側頭部にだけ残る頭髮も、真つ白といっているのではない。

思ったより、小柄だった。百五十五センチの美弥子とさして違わない。浴衣のはだけた胸元に、あばら骨が浮かんでみえた。

悪いひとではなさそうだ。もうすぐはじまる夏休みの予定を愛想のつもりで尋ねるなど、ごくふつうにあること。外国へゆくと聞いて、さらにその行先を尋ねなかったからといって、とくに不思議がることもない。ただの隣人を深く知る必要もないのだし、あまり詮索するのは失礼だと心得ているにすぎないのだろう。

きつと、そう。こちらの思いすごし。

そんなふうに考えることにして、美弥子はようやく腰をあげた。

宏昭の食べ残していったサラダをラップに包んで冷蔵庫へしまい、食器を洗う。四畳ばかりの台所は、子供の父親を加えた三人で座るのが精一杯の楕円形のテーブルを置くと、両脇に狭い空き間しか残らない。

流し台に身をすり寄せるようにして、美弥子は水をつかい、片づけをすませると、四畳半と六畳のふた部屋を通り抜けて、ベランダへ出た。洗濯機に籠いっぱいの衣類を移し、洗剤をふりかけてスイッチを入れる。全自動なのであとは放っておき、四畳半の居間へ戻って、ミシンに向かった。

子供の夏服くらいは、むかし通った洋裁の専門学校の知識があれば、難なく仕立てられる。

店で買うと馬鹿にならないので、すこしでも家計が楽になればと思い、いまは木綿<sup>もめん</sup>の半ズボンを縫っているところだ。

キーバンチャーの仕事で得る収入は、都心に近い二DKのアパートでの生活を支えるには十分とはいえず、子供の父親からの援助を足して、かろうじて成り立っている。

その父親が訪ねてくるのは、およそ十日に一度の割りであり、ときには取材に出かけて二、三週間も間が空くことがあるので、もとより子供とふたりきりの、単調だが穏やかな暮しが続いていた。

もうすぐ三歳になる。

美弥子は、いつとき手をやすめ、テレビが収納されたラックの上に金魚の水槽などと一緒に飾ってある一歳のときの写真に見入った。

鼻は低いけれど、黒の勝った円<sup>つぶ</sup>らな目が愛くるしい。まん丸い顔の、ひろく盛り上った額<sup>ひたい</sup>だけは父親似、あとは自分に似ていると思う。あらゆる意味で、やっと産むことのできた子供だった。そのいきさつを思い起こすたびに、よくここまで育ったものだ、まだ成長はこれからなのに、感慨にひたってしまう。

思えば、危うい時間の連続だった。それらをどうにか乗りきって、いまこうして平穩無事のときを過ごしている。

けれども——、と美弥子は思う。この夏は、どうしても穏やかには過ぎそうにない。きつと、大変な旅になる。本当にゆくのだろうか、未だに他人事<sup>ひとごと</sup>のように思えることがあるのだ。

った。

あなたのお父様 丁大吉さんはご健在でいらっしゃる  
ぜひとも近々に 故国 慶尚南道の郷里を訪ねられるようお勧め致します

一九八六年五月十五日

父上代理 山崎

唐谷美弥子殿、と宛名して、それだけの文面が送られてきたのは、三ヵ月ほど前のことだった。句読点のない分<sup>わ</sup>かち書きは妙な感じがしたし、差出人の、山崎、という姓にも憶えはなかった。消印は、前日に都内で投函されたことを示していたが、そこから手がかりがつかめるわけでもない。あまりにぶしつけだし、だいいち、こんな大事なことを伝えるのに、便箋一枚の、しかも二行はそっけなさすぎると思った。が、ただの悪戯<sup>いたずら</sup>にしては、書体は達筆できちんと整っているし、多くを語らずともわかるといったふうな、ある種の暖かみが感じられなくもなかった。

美弥子は、困惑した。生まれてこのかた、これほど困りはてたことはなかった。いまさら父親のことを持ちだされても、どう向かい合っているのかわからない。別れたのは、満一歳になつて間がないころのことだから、何の記憶も残っておらず、父親というものを実感できるはずもなかった。

ただ、子供のころから思っていた。会えるものなら、会ってみたい、と。ごく単純に、母親ではない、もうひとりの親の、姿かたちを見てみたい、と。それは、漠然とした感覚的なもので、現実にしてもなければすまされないもの、というのではなかった。片方の親しかいないことからくる性格的な欠陥を冷静に自覚できるくらいに、それはそれですまされたのである。が、海を渡れば会えるという一通の文面に接して、美弥子のなかで、子供のころからの憧れがほのかに香り立つようによみがえったことも確かだった。

ひとりの胸にしまっておけそうになく、かといって田舎の母親にすぐさま相談するということも、はばかられた。母親にとつては、ふるい傷に触れられるようなことかもしれない。姉の幸江に話してみようかとも考えたけれど、彼女にしても父親のことではいろんな思いをしてきたはずだ。そして、いまは何もかも葬り去っているにちがいない。

あれこれと考えて、結局、時機がくるまで黙っていていようと決めた美弥子は、子供の父親にだけ相談をもちかけることにしたのだった。

「行ってみればいいじゃないか」

と、彼はいった。口調にあまりに迷いがなかったので、

「ちよつと無責任なように聞こえるけど」

不満げにいうと、こんどは真剣な調子で、

「どっちみち行かずにはおれないだろう。この手紙の主は、ちゃんとそれを見越していると思うよ」

あえて短い文面にしたのは、その効果を十分に計算してのことだろう、という。

「慶尚南道以下の細かな住所もわかっているんだらう」

「それは戸籍謄本にしっかりと書いてあるわよ。認知はしてくれてあるから」

「そういうことも承知の上で、手紙を出しているね」

いわれてみて、確かに黙って見過ごせるものではないことに改めて気づいたのだった。

彼は、間波英昭（まなみ ひろあき）という、美弥子より七歳上の三十八歳になる写真家だった。都内のビルにスタジオ兼自宅を持ち、フリーのカメラマンとして仕事をしている。

ふだんの住居はスタジオだが、旅が多い身なので腰は落ちつかない。五年間の別居生活を経て、三年前に離婚してからは、独身主義を通していた。

「これには何かあるよ」

と、彼はいった。そして、とにかく行動を起こしたほうがいい、この夏は、ちょうどソウルあたりへ出かけたいと思っていたところだし、宏昭を連れて出かけよう、と勝手に話を先へ進めるのだった。

「ちょっと待ってよ」

と、美弥子は制したが、後が続かなかった。行くつもりがないとはいえないし、かといって彼のように積極的にもなれない。ただ、やはり気持ちには浮き足立って、結局、彼のいうままについていく、という形にならざるを得なかったのである。

その日までに、心の準備が必要だった。けれども、旅行の支度をするようにはいかず、そこ

はかどない不安や憂いが襲ってくる。このごろはともいらついで、ささいなことで宏昭にあたりたりもする。

美弥子は、ふとミシンの動きをとめて宙を見つめた。

唐突に浮かび出た考え――、さっきの老人がひよつとすると……。その姿を見かけるようになったのも、ちょうど例の手紙が舞いこんだ時期と符合する。

反射的に腰を上げ、部屋を出た。階段を駆け降り、第一月見荘へと向かう。道路から二、三歩入ったところの郵便受けを順に見る。一〇六号室が老人の住む一階のいちばん奥、と思われる。

だが、そこには細筆で山崎とは違った名が記されていた。

川本。

やはり思いすごしかったかと、美弥子はなぜか落胆を覚えながら、ゆっくりと部屋へ引き返した。